

令和2年度 関係人口創出・拡大のための中間支援モデル構築に関する調査・分析業務
業務実施報告書

【貴団体概要】

団体名	株式会社 Next Commons
事業名	地方と都市をつなぐリカレント教育の場づくりによる関係人口創出プラン

1 事業概要・主な成果

1.1 事業概要



豊富な地域資源やリソースを舞台に学び合うことを通じて
 地域市民×都心部からの参加者×他地域のオンライン参加者が交流する
 →学びの場が集まるコミュニティづくりで関係人口との継続的なつながりを維持していく。

●地方をキャンパスとしたリカレント教育のスキームが関係人口を創出する。

- ①地方特有の地域資源を学びのコンテンツに再編集し、可視化することで、地域外（都市部）からのアクセシビリティを上げる。
- ②学びの場をきっかけとしたコミュニティづくりで、関係人口との繋がりを継続的にする。

1.2 主な成果



・首都圏と地方のつながりだけでなく、地方と地方のつながりも生まれ、分散連携型のコミュニティネットワークへと展開が期待できる。

・地域の企画・制作会社、グリーンツーリズム NPO 団体、博物館等とコラボレーションしての企画開催も行うことで、参加人数の増加や幅広いターゲット層へのアプローチにつながった。

・新型コロナウイルスにより現地での企画は当初計画のように実施するのは困難であったが、県外から現地での参加を求めるニーズを確かに受けている。来年度は状況をみながら現地参加型の講座やイベントを徐々に復活させていく。

・蓄積してきた多様なコンテンツや講師ネットワーク、運営ノウハウを活かし、企業研修などのプログラムを共同開発し研修場所やワーケーションの実践地として展開した。（1月に2泊3日の短期ワーケーションプログラムの開催を予定していたがコロナの影響を考慮し来年度に延期。）

・クリエイターインレジデンスの取り組みにおいて、長期で受け入れを行った首都圏在住の4名全員が、滞在期間終了後も地域との継続的な関わりをしている。

・つくる大学を中心に、子どもの活動を応援する動きが生まれた。

2 モデル事業実施地域の概要と課題

2.1 事業実施地域の概要・課題

(1) <人口減少>

人口減が著しい地域の自治体は熱心に移住定住政策を行っている。しかし、日本全体で人口が減少している中で、限られた人材を奪い合う方法は、持続性が命題となる人口減少社会の日本において、解決策とはなりえない。そのため地方自治体は、移住や観光に限らず、地域に継続的に多様な形で関わる「関係人口」を維持するための体制整備が必要である。

今回事業の実施地域とする岩手県遠野市と石川県加賀市も上記例に含まれる人口減少を課題としている地域である。遠野市の人口は約 26,000 人。県の内陸部と沿岸部の丁度中間に位置しているまちである。農林業を基幹産業とし、かつては宿場町として栄えていたが、近年人口減少が続き 2005 年の国勢調査では 32,364 人であった人口も、2015 年の国勢調査では 28,062 人まで減少。ここ数年は毎年約 200~400 人が自然減している。また、人口の約 36%が高齢者であることや、転出が転入を上回る社会減が続いていることも問題視されている。市内に大学がないことなどから、高校卒業後の進学や就職を機に転出する人が多く、県外転出者の 50%以上は関東圏へ転出している。

また、加賀市は人口約 67,000 人で、総人口は 1985 年をピークに減少の一途を辿っている。1999 年に死亡数が出生数を抜き、1995 年の時点で転出数が転入数を超過。今後も右肩下がり人口減少が続いていくと想定されている。

(2) <居場所のニーズ、新しい働き方や暮らし方>

将来の予測が困難なことから、先行き不透明な社会と言われている現代。都市部ではコミュニティが欠落しているため職場以外の居場所のニーズが高まっている。また、高度経済成長期を支えた終身雇用制度の崩壊により、学び直しに注目があつまっている。特に都市部の企業で働く人材は自己啓発に対して意欲的である。働き方改革が提唱されている中でのコロナウィルスの感染拡大により、働き方や暮らし方の見直しを考える人が増えている。

今回事業の実施地域としている岩手県遠野市と石川県加賀市は、ローカルベンチャー事業を全国 13 拠点で展開する Next Commons Lab(以下、NCL) の第一拠点(遠野市)と第二拠点(加賀市)。遠野市は 2016 年から、加賀市は 2017 年から起業に意欲的な都市部の人材を誘致し、起業家の育成、支援を行ってきた。その土地の資源やプレーヤーを可視化することで、自己実現や挑戦の場として認知された結果、移住者たちによる多様な事業が立ち上がった。これら二つの地域には、広大なフィールドや豊富な地域資源があり、それらを低コストで活用できる環境が整っている。また、自然と共生してきた暮らしの達人や伝統工芸の職人など、地方ならではの技術や経験を持つ人が多く生活している。

しかし、ローカルベンチャー事業は地域おこし協力隊制度を活用するため、採用可能な人数に限度がある。また、任期期間内の 3 年で起業を目指すという目標を高いハードルに感じ、参画しづらさを感じ

じる人も多くいた。そこで、関係人口づくりが必要とされる今、定住せず都市部に拠点をもちながら、地方と関わりやすくする仕組みづくりが重要である。

都市部で起業を目指す人材にとって、ローカルベンチャーが自己実現や挑戦の可能性が高まるプラットフォームであったように、都市部の人材が地域と継続的に関わりを持つためには、新たなプラットフォーム機能が必要であると考えます。

2.2 関係人口創出・拡大に関わる取組みのビジョン・テーマ設定

学びをきっかけに地方と関わるプラットフォームを構築する。豊富な地域資源やリソースを活用したりカレント教育の場をつくり、都市部在住者が人口減少の続く地域と継続的に関わりを持つきっかけをつくる。そのため実施期間内では遠野市で基盤をつくり、加賀市へ事業を展開していく。

3 モデル事業の取組内容

3.1 取組みの全体像・スキーム

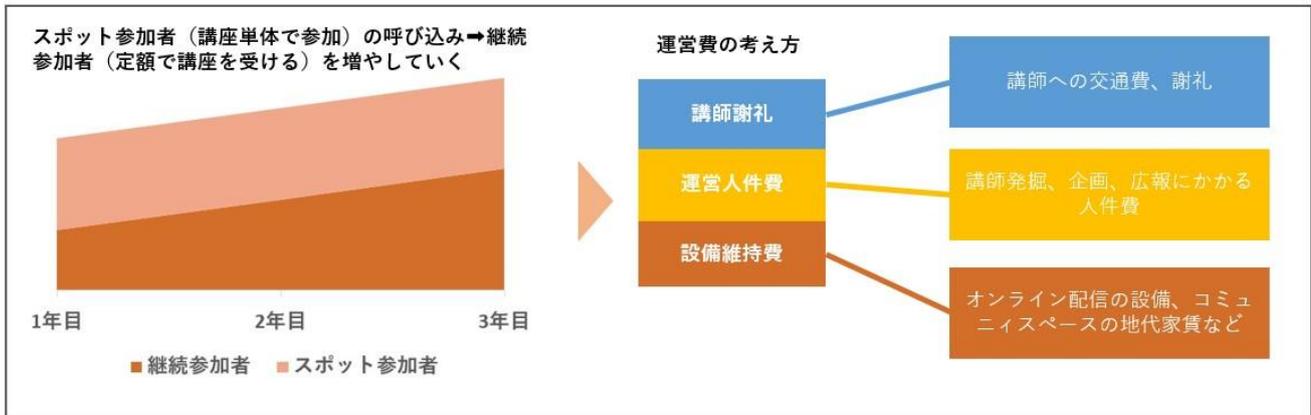


豊富な地域資源やリソースを舞台に学び合うことを通して
地域市民×都市部からの参加者×他地域のオンライン参加者が交流する
⇒学びの場に集まるコミュニティづくりで関係人口との継続的なつながりを維持していく。

○ 地域外の人々に向けて：地域資源やその可能性や課題を学びのコンテンツに再編集し、可視化することで、地域外（都市部）からのアクセシビリティを上げる

○ 地域の人々や資源：学び合いの交流から、知られざる地域の人々が可視化され、内と外の共創を生み出していく

○ 暮らし・技術・土地・歴史を学ぶことを通して、地域資源の活用、新しい仕事・生業のアイディア、地域間のネットワークが生まれ、持続的かつ発展的な関係人口の創出へつなげていく。



運営事務局の役割

講師・学生で構成されるコミュニティの運営

- ・交流会の開催
- ・講座やイベントの情報配信等
- ・地域行事への参加の呼びかけ

自主活動を実践する場の提供

シェアオフィス

- ・プロダクト開発
- ・手に職 / 起業
- ・地元企業に就職

→実践結果を講師として教える立場に

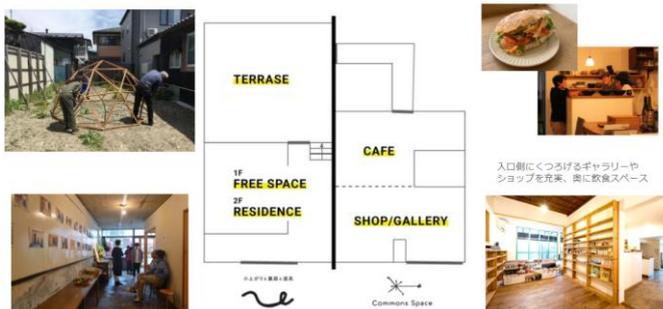
チャレンジショップ

市外の参加者向けにお試し移住住宅の案内

趣味で集まるサークルや研究会へ場の提供（コミュニティスペースなど）

○ つくる大学に関わる人たちが接点を持つ場として、自主活動の場としてのキャンパスを運営管理する。

キャンパス（NCL遠野）



キャンパス（NCL加賀）



※小上がりと裏庭と道具U 2階レジデンススペース



○ 運営事務局はこれまで遠野市でのローカルベンチャー事業にて都市部の人材の受け入れ・サポート事業を担っており、その経験を元に、学びの場に関わる人が地域と接点を持てるコミュニケーションの場づくり、滞在場所に関するサポートなどを行う。

○ 地域資源を学びのコンテンツに再編集し、可視化することで、地域外（都市部）からのアクセシビリティを上げるため具体的に下記活動に取り組む。

- (1) 講師の発掘
- (2) コンテンツづくり・企画
- (3) 広告宣伝
- (4) 事後フォロー、運営側への巻き込み

3.2 期待される効果・KPI

下記6つのKPIを目標として設定して、そのKPI数値を達成することで関係人口創出に対する成果を検証した。

①「首都圏から講座に参加する参加者割合目標達成」で関係人口創出できたか検証する。

現在のテスト運用をしている段階では首都圏からの参加者数が月間20%程となっているため、首都圏から参加するユーザ割合を検証期間終了時まで、60%の割合を目指す。

2020年9月全体目標参加者数：120名（内訳：首都圏40%（48名）・その他エリア60%（72名））

2020年12月全体目標参加者数：120名（内訳：首都圏50%（60名）・その他エリア（60名））

2021年3月全体目標参加者数：120名（内訳：首都圏72名・その他エリア48名）

* 数値計測方法：ECサイト顧客データから計測

②「首都圏受講者の講座参加回数（リピート率）の目標達成」で関係人口創出できたか検証する。

1ユーザあたりの連続講座参加回数が6回を目指す。6回の算出方法は毎月各カテゴリの講座を最低1回＝通年12回と想定し12回のうち50%参加することを目標として6回と設定。

* 数値計測方法：ECサイト注文データから計測・分析

③「首都圏月額会員の継続率目標達成」で関係人口創出できたか検証する。

首都圏月額会員の3ヶ月継続率平均50%を目指す。

* 数値計測方法：ECサイト顧客データから計測

④「首都圏で活動している講師が開催するの講座開催割合」で関係人口創出できたか検証する。

講座開催数KPIを毎月10回と設定しており、そのうち30%を首都圏で活動している講師による講座となる講座ラインナップを目指す。ただし、受入地域の特性を生かした学びの場を維持するためにその上限を30%とし、首都圏在住講師と地域資源を掛け合わせたコンテンツの創出を目指す。

⑤「つくる大学学生オンライングループでの参加者数の増加」で関係人口創出できたか検証する。

つくる大学に継続して関わるプラットフォームとしてオンライングループをつくり、グループ参加者数増加を目指す。

* 数値計測方法：FaceBook グループから計測

⑥「つくる大学キャンパス利用者数の増加」で関係人口創出できたか検証する。

つくる大学学生会員向けに、講座参加利用・カフェ利用・シェアスペース利用の割引サービスを行っており、それらの利用者増加を目指す。

* 数値計測方法：レジデータから計測

4 事業実施に係る運営体制

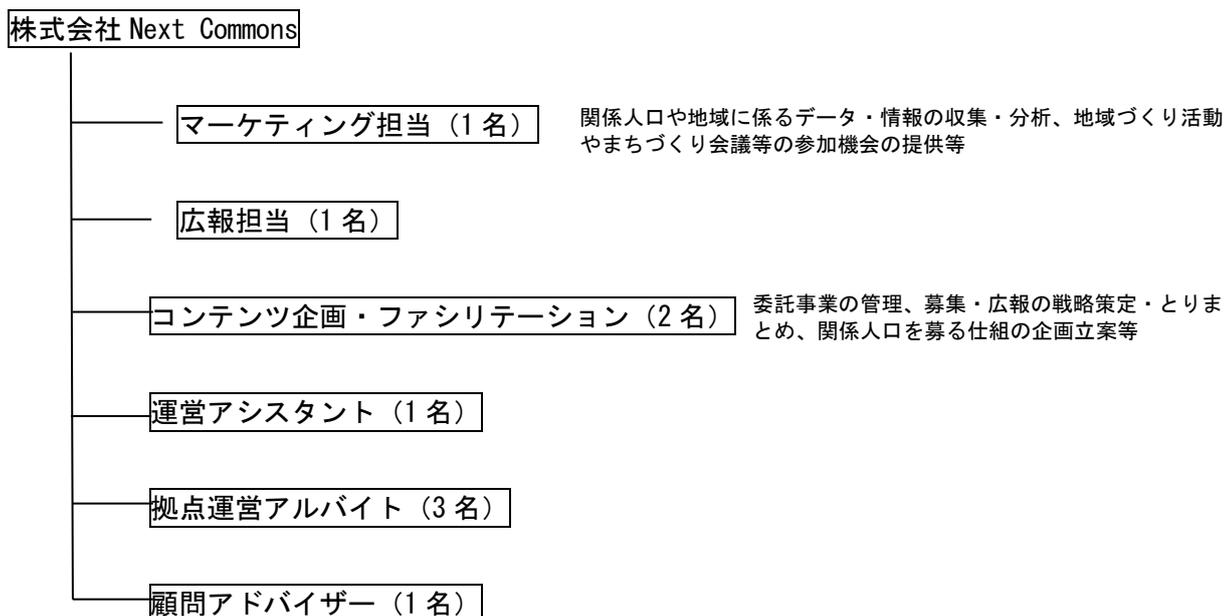
4.1 事業実施体制

株式会社 NextCommons は、岩手県遠野市にて 2016 年から現在までローカルベンチャー事業を展開。首都圏・周辺エリアから参画した、多数の起業家を輩出している。またグループ会社である一般社団法人 NextCommonsLab では全国 13 拠点で同じ取り組みを行っている。

今回のリカレント教育の場づくりの前から、岩手県遠野市にて「つくる大学」をスタート。遠野市内ではプレスタートしており、1 年近く拠点での開催を中心に行っている。基本的な運営ノウハウは徐々に増えており、また培ってきたコネクションやコアなファン層も一定数いる状況である。

その他にも株式会社 LIFULL（東証 1 部）とアライアンスを組み、人が暮らせるインフラを整備し定額サービスで提供する関係人口創出プロジェクトとして、Living Anywhere Commons という事業の遠野拠点を運営している。マーケティング担当が 9 月末で退職となり、10 月～12 月は引継ぎやマンパワー不足が起こった。

事業実施体制



4.2 事業実施団体及び関係機関の役割

事業主体を株式会社 NextCommons が担い、学びの場のプラットフォームに Next Commons Lab 加賀の学びのコンテンツを載せていく。講師発掘や企画相談、広報窓口として遠野市役所、また全国に広がるネットワークへの広報等で一般社団法人 Next Commons Lab ご協力をいただいた。

1	株式会社 Next Commons	リカレント教育の場の構築と運営・管理全般を実施する。遠野地域でのコンテンツ企画・運営も担当する。
2	Next Commons Lab 加賀	加賀地域でのコンテンツ企画・運営を担当する。
3	遠野市役所	講師の発掘や遠野市内への広報の窓口として機能する。
4	一般社団法人 Next Commons Lab	各 Next Commons Lab 拠点への展開時の窓口として機能する。

5 事業実施内容

5.1 実施スケジュール

講座自体の PR をすべく当初予定していたプレスリリースは不要と判断した他、人事変更に伴う体制見直し等で石川県加賀市での講座開始のスタートが予定より半月遅れたといった変更はあったものの、スケジュールは下記の通り、大きな変更なく進行した。

【当初のスケジュール】

実施事項	8月			9月			10月			11月			12月			1月			2月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1 講師発掘（遠野）	現地講師の発掘を継続実施																				
2 コンテンツ企画～実施（遠野）	新規講座の企画～実施																				
3 つくる大学の広告宣伝（遠野）	SNSの運用・プレスリリース等																				
4 講師発掘（加賀）	現地講師の発掘を継続実施（NCL遠野が伴走）																				
5 コンテンツ企画～実施（加賀）	新規講座の企画～実施（NCL遠野が伴走）																				
6 つくる大学の広告宣伝（加賀）	プレスリリース・講座の広告宣伝																				
7 つくる大学のコミュニティグループの運営	つくる大学参加者向けコミュニティの運営を継続して実施																				
8 コワーキングスペースの運営管理	つくる大学キャンパスとして利用するためのスペースの運営管理																				
9 効果検証																効果検証					
10 報告書とりまとめ																			報告書とりまとめ		

【報告時点の最新スケジュール】

実施事項	8月			9月			10月			11月			12月			1月			2月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1 講師発掘（遠野）	現地講師の発掘を継続実施																				
2 コンテンツ企画～実施（遠野）	新規講座の企画～実施																				
3 つくる大学の広告宣伝（遠野）	SNSの運用																				
4 講師発掘（加賀）				現地講師の発掘を継続実施（NCL遠野が伴走）																	
5 コンテンツ企画～実施（加賀）							新規講座の企画～実施（NCL遠野が伴走）														
6 つくる大学の広告宣伝（加賀）							講座の広告宣伝														
7 つくる大学のコミュニティグループの運営	つくる大学参加者向けコミュニティの運営を継続して実施																				
8 コワーキングスペースの運営管理	つくる大学キャンパスとして利用するためのスペースの運営管理																				
9 効果検証																効果検証					
10 報告書とりまとめ																			報告書とりまとめ		

5.2 事業の広報・アプローチ

- ・ つくる大学通信等の発行と配布
- ・ 定期的な情報発信
- ・ 口コミでの認知度アップを狙った企画への無料招待枠の設定
- ・ つくる大学の広報冊子作成
- ・ Facebook 広告を使った新しいターゲットへのアプローチ

※詳細は 5.3 活動内容①参照

5.3 活動内容①つくる大学の存在自体を認知してもらうための取り組み

◎つくる大学を中心に関係人口を創出していくため、まずはつくる大学自体を地域内外の様々な人に認知してもらうための広報活動に力を入れて取り組んだ。

(1) つくる大学通信等の発行と配布

・ 2020年8月から毎月、紙媒体の広報物「つくる大学通信」を発行。募集中の講座、イベント情報を掲載したほか、開催された講座やイベント等について講師や参加者の声も盛り込んだレポート記事、サークル活動の場としてのレンタルスペース利用募集といったつくる大学キャンパスからのお知らせなどを掲載した。

・制作した「つくる大学通信」はつくる大学キャンパスに配置するだけでなく、地域の店舗や関わりのある人に直接手渡したり、市立図書館や観光案内所などに数十部程度配置依頼を行ったりと、より多くの人に読んでいただけるよう広報活動にも力を入れて取り組んだ。普段の広報活動では届ききらないより多くの人に、つくる大学の存在を知り興味を持っていただけるよう、岩手日報の新聞折込用の広報物も制作し発行した。



(2) 定期的な情報発信

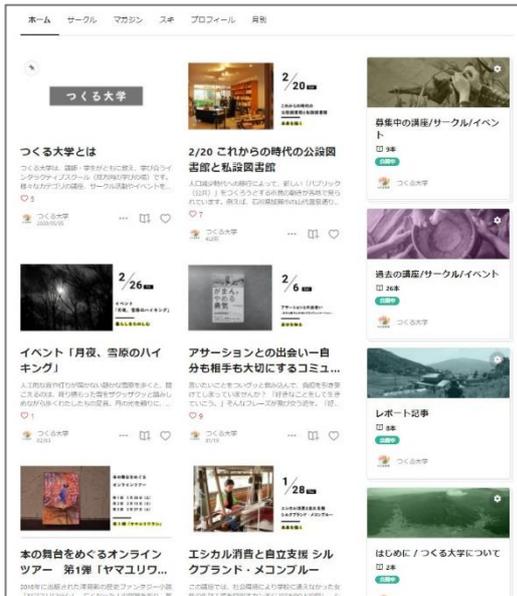
・「つくる大学通信」だけでは伝えきれない、運営事務局の顔が見えるようなつくる大学キャンパスの日常の風景や、リアルタイムの講座等の情報などを伝えること、また紙媒体の広報物よりもスマートフォン等で情報をキャッチしている人にも情報を届けることを目的にして、SNS（Facebook、Instagram、Twitter）での定期的な情報発信を行った。SNSを利用して情報発信を行ったことで、近隣住民だけでなく首都圏在住の人や、つくる大学の存在を認知していなかった人へも新たに情報を届けることができ、新規の参加者開拓につながった。

<SNS フォロワー数の推移>

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
Facebook	530	530	603	618	621	641	642	657
Instagram	21	22	24	28	31	32	33	37
Twitter	29	34	45	48	49	51	52	53

・note に講座/イベント情報やレポート等の情報を集約して掲載した。SNS ではリアルタイムで情報を得られるが、次々と新しい情報が流れるため、情報を集約し蓄積する機能として note を使用した。ここには遠野での情報だけでなく加賀で開催される講座/イベント情報も掲載している。SNS か

らの動線もつくり、SNS で得た情報から講師の紹介等詳細を note で確認できるようになっている。



(3) 口コミでの認知度アップを狙った企画への無料招待枠の設定

・「つくる大学通信」や SNS 等での広報活動を実施する中で、これらは広くつくる大学を認知してもらうことにはつながるが、そこから実際によりつくる大学を中心に関わりを持ってくれる人を増やすには、人づてで情報を伝えていくことがより有効であることが分かった。興味はあってもそこから一歩踏み出して参加したり、企画者になったりすることになかなか繋がらない傾向が多くみられたのだ。そこで、実際に知り合いがおすすめしていた講座やイベントには参加がしやすいと意見もしばしば聞いていたことから、口コミでより情報が広まっていくような方法を検討した。

・地域で発信力がある人、多くの人とつながっていて SNS 等での情報発信も定期的に行っている人を講座やイベントに招待し、つくる大学や企画に関して SNS や口コミ等で伝えてもらうため、無料招待枠を設定した。無料招待枠を設定した企画のひとつに、9 月~10 月にかけて開催した連続講座「地球環境を考える」がある。招待枠を用意したことにより、これまでなかなか巻き込むことができなかった比較的高い年齢層の人も、つくる大学というものを認知するきっかけとなった。

(4) つくる大学の広報冊子作成

・つくる大学のコンセプトやこれまでの企画、つくる大学に関わってくれた人物等を紹介する広報冊子の作成を行った。2020 年度の取り組みを振り返り、統計情報や開催した企画と参加者の声等を伝えるほか、改めてつくる大学が目指すものが伝えられる内容とした。

(5) Facebook 広告を使った新しいターゲットへのアプローチ

・2 月には Facebook 広告を利用した広報と分析を実施した。分析の結果は以下の通りとなった。同じ広告費で 2 種類の企画について広告を打ったが、期間を長くしたとしてもリーチ数が必ずしも伸びるわけではないことが分かった。実際に期間を 8 日間で設定した B の講座の方が首都圏からの参加者が伸びた。今後の広報の仕方についても参考となる分析を得られた。

A. 「本の舞台をめぐるオンラインツアー」

期間：17 日間

広告費：10,000 円

リーチ数：2,293

イベントの返答：36

（ターゲット設定）

年齢：18 歳～65+歳

居住地：千葉県 我孫子市から 79 km 圏内

関心：興味・関心：読書、絵画、美術、日本の歴史、歴史、読書会、ノンフィクション(本)、本、執筆または旅行

B. 講座「エシカル消費と自立支援 シルクブランド・メコンブルー」

期間：8 日間

広告費：10,000 円

リーチ数：3,228

イベントへの返答：74

（ターゲット設定）

年齢：20-60 歳

居住地：東京、大阪、遠野から 48 キロ圏内

関心：キャリア教育、マーケティング、企業、チャリティー、マネジメント、旅行、レディース服または紳士服、よく旅行する人

5.4 活動内容②地域内外の人が出会う、関係人口創出の入り口となる機会づくり

◎地方在住者と都市部在住者それぞれが、教え合い、学び合うインタラクティブな学びの機会をつくるために、地域資源を活用した講座、サークル、イベントの企画・運営を行った。地域内外の人が出会い、ともに学びあう場をつくりコミュニティ育成を行うことが、関係人口創出へとつながった。

（1）講師の発掘

遠野市と加賀市を初め、都市部も含めた地域内外の講師を発掘した。地域の人へのヒアリングや NCL のメンバーからの紹介、一度つくる大学の講師や参加者として関わりを持った人からの紹介などにより、講師を発掘することができた。

<例 1>



・ 猟師兼養蜂家 高橋蔵さん

・ プロフィール：遠野市在住。祖父・父ともに狩猟免許を持って銃をつかった猟をしていた影響から、20代で免許を取得し10年にわたり活動。元行政職員。父の健康悪化を機に、父が趣味で行っていた養蜂を継ぎ、現在は蜂蜜屋と猟師を生業とする。若い人に縁遠かった養蜂と狩猟という仕事を生業化することを実践・模索中。

・ 担当講座：「ミツバチの世界を知る」

・ 企画開催までの経緯：事務局スタッフと以前より交流があり、つくる大学に対しても様々な提案をし

てくれたことから実現した企画。事務局と一緒に企画しませんかと話を持ち掛けたところ、自らが持っているスキルや知識を最大限活用し、自分にとっても楽しく参加者にとっても楽しい内容を様々なアイデアをから検討し、積極的に企画に関わってくれたことで今回の講座が実現。

<例 2>



- ・籠編み作家 佐藤秀夫さん
- ・プロフィール：遠野市宮守町在住。森林や山の管理の仕事をするかたわら、昔から藁草履づくりなど手仕事を得意とする。妻・智江さんがリースづくりなどを始めたことをきっかけに、リースの土台づくりや籠編みづくりなどを始める。豊富な山の知識と手先の器用さで、くるみや山ぶどうの籠などを編んでいる。
- ・担当講座：「胡桃の皮で小さな籠を編む」
- ・企画開催までの経緯：事務局スタッフが講師発掘のため何度か通いながら、信頼関係を築いて実現した企画。スタッフが素材集めから教わったり、制作の仕方を事前に指導いただいたり、二人三脚で講座開催に至った。

<例 3>



- ・松本信夫さん
- ・プロフィール：神奈川県在住。臭いや虫の発生が少なく比較的手間もかからない家庭用コンポスト「キエーロ」の考案者。全国各地で活用を広める活動を実施。
- ・担当講座：「地球環境を考える 第2回食を地に還すコンポストを知る～うわさのキエーロとその導入地域神山町の取り組み」
- ・企画開催までの経緯：岩手県の陸前高田市などで、キエーロの利用を広める活動を実施していた中で、事務局スタッフとつながりのあった方からの紹介で講師と出会う。講師自身が遠野市でキエーロの活用を進めたいという想いと重なり、地球環境全体を考える今回の講座が実現した。

(2) 企画・運営

土地の歴史・文化を学ぶ講座から自然豊かなフィールドを生かしたサークル活動、コミュニケーションスキルを身につけるためのワークショップなど、6つのカテゴリーにあてはまる様々な分野の企画を開催することができた。企画運営の進め方においては、教える側と学ぶ側が共にひとつの体験をする内容であったり、双方向にコミュニケーションを取り合える内容であったりと、関わる人すべてが対等な立場で学びあえるよう、場の運営の工夫を行った。

▼つくる大学のコンセプトと6つのカテゴリー

つくる人があつまる つくるからはじまる

自らのスキルや特性を活かし、価値を創造する「つくる人」と
自分を知り、できることを考えるこれから「つくろうとする人」。
つくる大学では、みんなそれぞれが
教え合い、学び合い、つくる喜びを見えます。
自らの手で、自分らしい生き方を実現するために、
つくることから始めよう。

働くを考える：自分を知る：暮らしをたのしむ：土地から学ぶ：表現を広げる：未来を描く

(3) 事後フォロー、運営側への巻き込み

企画開催後、参加者へアンケート調査を行い企画に参加した感想や今後のつくる大学に期待すること等の意見を収集した。また講師との振り返りも行い、この実施後のフォローにより同じ講師がまた違う企画に挑戦することへもつながった例もある。

<開催企画一覧>

開催日	講座・サークル・イベント内容	講師の拠点	参加者	うち首都圏
8月11日	サークル「森あそびくらぶ」	遠野	7	0
8月16日	サークル「大人の自由研究会」	遠野	4	0
8月19-20日	イベント「早池峰山のお山かけを再現！たいまつを灯し、山頂を目指す。」	遠野	3	0
8月22日	サークル「普通に見えて結構しんどい。」	遠野	3	0
8月30日	講座「持続可能な社会に向けて、地球環境を知る」	首都圏	13	3
9月11日	サークル「森あそびくらぶ」	遠野	3	0
9月13日	クリエイターインレジデンス 小川さんアウトプット企画	東京	7	不明
9月13日	サークル「大人の夏の自由研究会」	遠野	4	0
9月27日	連続講座「ミツバチの世界を知る Vol.1」	遠野	3	0
9月28日	で・くらす遠野コラボ企画「まちの広報誌をつくろう」	遠野	2	1
9月29日	連続講座「地球環境を考える～ゼロ・ウェイストの一步」	首都圏	6	1

	編～ 第1回」			
10月3日	連続講座「地球環境を考える～ゼロ・ウェイストの一步 編～第2回」	首都圏	24	1
10月4日	連続講座「ミツバチの世界を知る Vol.2」	遠野	4	0
10月11日	連続講座「ミツバチの世界を知る Vol.3」	遠野	2	0
10月31日	サークル「森あそびくらぶ」	遠野	4	0
10月31日	連続講座「地球環境を考える～ゼロ・ウェイストの一步 編～第3回」	遠野	6	0
11月12日	講座「つくり手を目指す集中講座！ノ馬-nouma-をつくろ う Vol.1」	遠野	8	1
11月23日	イベント「NCL 加賀バーチャルツアー」	加賀	4	0
11月25日	で・くらす遠野コラボ企画「まちの広報誌をつくろう Vol.2～企画会議」	遠野	1	0
11月26日	講座「つくり手を目指す集中講座！ノ馬-nouma-をつくろ う Vol.2」	遠野	8	1
11月29日	イベント「NCL 遠野拠点案内ツアー」	遠野	1	0
11月30日	クリエイターインレジデンス Haburi 展示「OBSCURED LANDSCAPE／遮られた風 景」アフタートークイベント	首都圏	5	不 明
12月5日	で・くらす遠野コラボ企画「まちの広報誌をつくろう Vol.2～取材・制作ワークショップ」	遠野	2	0
12月5日	講座「つくり手を目指す集中講座！ノ馬-nouma-をつくろ う Vol.3」	遠野	8	1
12月5日	市史編さん講座	遠野	11	3
12月12日	講座「つくり手を目指す集中講座！ノ馬-nouma-をつくろ う Vol.4」	遠野	8	1

12月19日	イベント「NCL 遠野拠点案内ツアー」	遠野	0	0
12月26日	イベント「NCL 遠野拠点案内ツアー」	遠野	0	0
1月16日	イベント「NCL 遠野拠点案内ツアー」	遠野	0	0
1月29日	講座「エシカル消費と自立支援 シルクブランド・メコンブルー」※加賀とのコラボ企画	首都圏	8	5
1月30日	講座「本の舞台をめぐるオンラインツアー第1弾「ヤマユリワラシ」第1回」	遠野	7	3
2月6日	講座「アサーションとの出会い-自分も相手も大切にするコミュニケーション-」	遠野	8	0
2月13日	講座「本の舞台をめぐるオンラインツアー第1弾「ヤマユリワラシ」第2回」	遠野	9	1
2月20日	公開対談「これからの時代の公設図書館と私設図書館」 平賀研也x土肥潤也 聴き手 李明喜	首都圏	100	約40
2月26日	イベント「月夜、雪原のハイキング」	遠野	報告時未	報告時未
2月26日	講座「動画制作講座」	遠野	報告時未	報告時未

	講座開催回数	講座参加者数	うち首都圏からの参加割合
8月	5	26	11.5%
9月	6	25	8%
10月	5	40	2.5%
11月	6	27	11.1%
12月	6	29	17.2%
1月	3	15	53.3%

2月	3(未2)	121	33.9%
合計	36	283	19.66%
首都圏から講座に参加する参加者割合 目標 60% 実績 19.66%			

<開催事例>

A. 連続講座「地球環境を考える～ゼロ・ウェイストの一步編～」



地球環境を考える
～ゼロ・ウェイストの一步～

第1回 9月29日(火)
第2回 10月3日(土)
第3回 10月31日(土)

未来を描く

- ・地域外の講師を呼び、地域内の参加者を巻き込んで開催できた事例。

- ・総参加者数：38名（うち首都圏2名）

- ・実施内容

- 第1回

- 「食の循環がなぜ必要かと遠野市のごみの課題」

- まずは今の食の問題やそれに対する取り組みについて、早くから環境行動モデル都市として選定されてきた横浜市で、ごみの廃棄やリサイクルの定着に取り組み、環境問題の啓発活動等も行っているかんきょうデザインプロジェクトの武松さんから説明いただいた。食に関する課題を知った後は、つくる大学の拠点がある、岩手県遠野市の現状や課題を、遠野市役所環境課の佐々木さんよりお話を伺った。

- 日時：9月29日(火) 19:00-21:00

- 場所：小上がりと裏庭と道具U / オンライン参加可

- 参加費：1500円（つくる大学 学生会員の方は無料）

- 講師：かんきょうデザインプロジェクト武松昭男さん（首都圏在住）、遠野市環境課佐々木将さん（遠野市在住）

- 第2回

- 「食を地に還す“コンポスト”を知る～うわさのキエーロとその導入地域神山町の取り組み」

- 神奈川県葉山町に住む松本信夫さんご夫妻が考案した、家庭用生ごみ処理機「キエーロ」。臭いや虫の発生が少なく比較的手間もかからないことから注目され、現在は生ごみ削減の切り札として、じ

わじわと普及が進んでいる。考案者の松本信夫さんをお呼びし、開発の経緯や生ごみが消える仕組みについて伺った。また、積極的にキエーロの活用が行われている徳島県神山町で、「コミュニティー・アニメーター」として活動する高田 友美さんから、キエーロの導入事例や使い方を学んだ。

日時：10月3日（土） 13：00-15：00

場所：みらい創りカレッジ / オンライン参加可

参加費：1500円（つくる大学 学生会員の方は無料）

講師：キエーロ考案者松本信夫さん（首都圏在住）、神山つなぐ公社 高田 友美さん（徳島県在住）

第3回

「実践！キエーロを作って、使ってみよう」

小さなベランダなどのスペースにも置けるキエーロ。仕組みを理解すれば、自分たちで箱をつくることのできる。つくる大学のキャンパスでもあるカフェ Commons Space の生ごみを処理するため、キエーロをDIYで2台制作した。

日時：2020年10月31日（土）13：00～16：00

場所：小上がりと裏庭と道具U

参加費：1500円&キエーロを作成して持ち帰りたい方は材料費

講師：超低コスト住宅プロジェクト 小関直さん（遠野市在住、ローカルベンチャー卒業生）



B. で・くらす遠野コラボ企画「みんなでつくろう！まちの広報誌」



9/28 Mon

で・くらす遠野×つくる大学
みんなでつくろう！
まちの広報誌

表現を広げる

- ・地域内の他団体と連携して企画し、地域内外の参加者が共にワークショップに取り組んだ事例。
- ・総参加者数：6名（うち首都圏1名）
- ・実施内容
第1回

遠野の移住定住に関する総合窓口を担っている「で・くらす遠野」。移住相談への対応や空き家情報の案内、起業支援などを地域をよく知る「遠野暮らしアドバイザー」として取り組みを展開している。その取り組みのひとつである「で・くらす遠野 市民制度」には、全国各地から約 200 名が加入。その全会員に年 4 回、遠野の季節の情報を伝える広報誌を発行している。今回の講座で制作したのは、そので・くらす遠野広報誌の夏号。参加者と講師と一緒に特集の企画～取材～制作までを行う。

日時:6 月 28 日(日) 10:00-17:00

場所:Commons Space

参加費:0 円

講師:ローカルプロデューサー富川岳さん(遠野市在住)、アートディレクター山内稜平さん(盛岡市在住)

協力:遠野市役所観光交流課

第 2 回

今回の講座では、岩手県遠野市の移住・定住支援団体「で・くらす遠野」が年 4 回発行する会員向けの広報誌を制作するための、企画会議をオンラインで実施。講師を務めたのは遠野市でローカルプロデューサーとして活動する富川 岳さんと盛岡市のデザイン事務所・grams design office でデザイナーを務める山内稜平さん、フリーランスのライター・編集者として活動しながら、つくる大学事務局を務める宮本の 3 名。

※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、オンライン企画会議のみ参加者を募って行い、取材は事務局と講師で実施。

日時:9 月 28 日(月) 19:00-20:30

場所:オンライン配信 (zoom の URL を配布します)

参加費:0 円

講師:ローカルプロデューサー富川岳さん(遠野市在住)、アートディレクター山内稜平さん(盛岡市在住)

協力:遠野市役所観光交流課

第 3 回

今回制作したのは、で・くらす遠野広報誌の新春号。前回と同様、参加者と講師と一緒に制作に取り組んだ。講師を務めたのは遠野市でローカルプロデューサーとして活動する富川 岳さんと盛岡市のデザイン事務所・grams design office でデザイナーを務める山内稜平さん、フリーランスのライター・編集者として活動しながら、つくる大学事務局を務める宮本の 3 名。つくる大学のレジデンスに宿泊に来ていた首都圏在住者の方も参加し、共にワークショップに取り組めた時間となった。

日時:【企画会議】 11 月 25 日(水) 19:00-20:30

【取材～制作ワークショップ】 12 月 5 日(土) 10:00-16:00

場所：【企画会議】オンライン配信（zoomのURLを配布します）

【取材～制作ワークショップ】小上がりと裏庭と道具U（岩手県遠野市中央通り5-32）

参加費：0円

講師：ローカルプロデューサー富川岳さん（遠野市在住）、アートディレクター山内稜平さん（盛岡市在住）

協力：遠野市役所観光交流課



▲取材の様子



▲制作の様子



▲完成した広報誌

C. 定期サークル「森あそびくらぶ」



森あそびくらぶ

- 第1回 7/10 (Fri)
- 第2回 8/7 (Fri)
- 第3回 9/11 (Fri)
- 第4回 10/31 (Sat)

暮らしをたのしむ

- ・地域内の講師と企画し、地域内外の参加者が交流した事例。
- ・総参加者数：14名（うち首都圏1名）

・実施内容

この企画は、岩手県遠野市の自然と向き合いながら、集まった人々と共に、ゆったりとした時間を共有するサークル活動。開催頻度は月に1回。焚き火、畑仕事、びわの葉温灸、ハーブの匂い袋づくりなど、季節に合わせて、その時だからこそできることをピックアップして、毎回異なるテーマ設定を行う。

第1回

7月10日に開催した、第1回のテーマは「ダッチオープンの夕食会」。

ヨガの要素を取り入れながら身体をほぐし、感覚を研ぎすませる準備がととのってから、ダッチオープンに野菜をたくさん入れて火にかけた。待っている間は、自分が気に入った葉っぱや花を摘んで、小さな自然のアート作品づくり。夢中になっているうちに、ダッチオープンからはいい匂いが。集まったみんなでテーブルを囲み、大自然の中でたのしい夕食会となった。クリエイターインレジデンスで首都圏から遠野に長期滞在していたクリエイターも参加し、遠野の自然豊かなフィールドを満喫し地元の人と交流できた時間となった。

日時：7月10日（金）16:00-19:00

場所：遠野市附馬牛町内

第2回

森あそびくらすの第2回は、七輪で珈琲豆の焙煎することに挑戦。珈琲の焙煎をする傍らでは、ダッチオープンでカレーづくり。じっくり煮込んだ夏野菜のカレーは、みんなでテーブルを囲んでおいしくいただいた。自然の中で、おしゃべりしながらリフレッシュできる楽しい時間となった。

日時：8月7日 16:00~19:00

場所：遠野市附馬牛町内

第3回

9月11日に開催した森あそびくらすでは、焚き火で珈琲焙煎をしてみたり、花を摘んできてポタニカルアートを楽しんだり、野菜やお肉をごろごろ入れてダッチオープンで煮込んで夕食を食べたりした。夕食後、焚き火を囲み、星を眺め焙煎した珈琲を飲みながらゆったり過ごしたのが特別な体験になったという感想が聞かれた。

日時：9月11日 16:00~19:00

場所：遠野市附馬牛町内

第4回

10月31日、今年度最終回となる森あそびくらすを行った。この日は満月。日が落ちるとあつという間に寒くなったが、焚き火を囲み満月を眺めながら楽しい時間となった。今回は燻製に挑戦してみたり、焚き火でホットサンドをつくって食べたりし、初参加3名からも、「初めて会った人たちとの時間なのに、こんなにリラックスしてスマホも見ず楽しんで嬉しかった！」など感想いただいた。

日時：10月31日 15:30~18:30

場所：遠野市附馬牛町内



5.5 活動内容③関係人口創出・拡大につながる個別のコーディネートの実施

◎つくる大学に講師や参加者等として一度関わりを持った人が、その後も継続して関わりを持ち関係人口へとつながるよう、個別のフォローやコーディネートを実施した。事務局コーディネーターが地域の人とのつなぎ役として、地域外の人を地域内の人とマッチングし場のセッティング等のコーディネートを行ったことが、関係人口創出・拡大へとつながった。

事例：クリエイターインレジデンスの受け入れ



Release

"つくる"活動に取り組む
クリエイターが遠野に

クリエイター・イン・レジデンス

〈つくる大学が行ったクリエイターインレジデンスの概要〉

遠野にはかつて「文武修行宿」と呼ばれる、絵師や文人など技術を持った人たちが自らの技術を地域の人達に教え、伝える代わりに宿泊ができる仕組みを持つ宿があった。クリエイターインレジデンスは、その取り組みを現代に復活させて行うもの。国内外からクリエイターを一定期間招聘し、小上がりと裏庭と道具りのレジデンスに宿泊いただきながら、地域での制作活動やヒアリング等に取り組んでもらう。地域外から訪れたクリエイターが、持っているスキルや知識、地域での滞在中で得た学びや制作物等を、地域の人へ還元するアウトプットの場として、つくる大学での講座やつ

くる大学キャンパス（Commons Space／小上がりと裏庭と道具 U）での作品展示等を企画して実施する。

〈つくる大学事務局が実施したコーディネート〉

- ①地域の取材先、フィールドワーク先等の紹介・案内
- ②アウトプット企画のコーディネート、広報、運営
- ③滞在期間終了後の定期的な情報交換。再度地域に関わる際のサポート・コーディネート

〈当初予定していた受け入れスケジュール〉

	滞在期間	講座・展示開催日
フォトグラファー／ライター 1. 稲村 行真	7月4日(土)～7月12日(日)	7月12日(日)
2. 江渡 浩一郎	7月8日(水)～7月21日(火)	7月19日(日)
アーティスト 3. Haburi	7月19日(日)～8月1日(土)	8月1日(土)
3. 音無 史哉	8月2日(日)～8月10日(月)	8月9日(日)
4. 金谷 幸奈	8月10日(月)～8月23日(日)	8月22日(土)
5. 小川 周佑	8月17日(月)～8月31日(月)	8月30日(日)
6. 野口 竜平	8月25日(火)～9月7日(月)	9月6日(日)

※8名応募。うち1名諸事情により辞退。他7名は上記のスケジュールで受け入れ予定だったが、新型コロナウイルスの影響によりうち3名は受け入れ保留となっている。

〈受け入れ実施内容〉

(ア) 稲村 行真 フォトグラファー／ライター 滞在期間：7月4日(土)～7月12日(日)



[プロフィール]

1994 年生まれ、千葉県出身。写真の作品制作や執筆を通して、地域の魅力を再発見している。主なプロジェクトに、石川県加賀市の獅子舞文化の魅力を探る「KAGA SHISHIMAI project」(2019～)などがある。遠野市の鹿踊や神楽に関して興味があり、今回の企画に応募。石川のプロジェクト同様に、伝統芸能や祭りの分野で新しい表現を探る。

[滞在中の過ごし方]

- ・ヒアリングや撮影
- ・遠野の郷土芸能団体に足を運び、取材や撮影を実施。郷土芸能の背景にある信仰や供養の捉え方も考察。



[アウトプット]

- ・つくる大学キャンパスである Commons Space において、滞在中に撮影した写真の展示会と、取材に関するプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションには滞在期間中、ヒアリングや撮影に協力いただいた地域の方が多く訪れた。



[滞在期間終了後]

- ・今回の滞在に関するフィードバック
- ・滞在に関するレポートをブログで投稿
- ・その後も取材を継続するために地域を訪問しヒアリング等を実施

[関係人口へとつながる発展]

- ・新たに遠野を何度も訪れる存在へ。今回のクリエイターインレジデンス滞在期間で始めた取材を継続し最終的に本にまとめるため、定期的に事務局コーディネーターや滞在中にヒアリングを行った地域の人と情報交換をし、秋に再度遠野を訪れヒアリングを行った。

(イ) 江渡 浩一郎 産業技術総合研究所 主任研究員／慶應義塾大学 SFC 特別招聘教授／メディアアーティスト 滞在期間：7月8日(水)～7月21日(火)



<プロフィール>

東京大学大学院情報理工学系研究科博士課程修了。博士(情報理工学)。1997年、アルス・エレクトロニカ賞グランプリを受賞(sensorium チーム)。2001年、日本科学未来館「インターネット物理モデル」制作。2011年、ニコニコ学会βを発足。グッドデザイン賞ベスト100、アルス・エレクトロニカ賞栄誉賞を受賞。産総研では「利用者参画によるサービスの構築・運用」をテーマに研究を続ける。主な著書に『ニコニコ学会βのつくりかた』、『進化するアカデミア』、『ニコニコ学会βを研究してみた』、『パターン、Wiki、XP』。2017年、科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞(理解増進部門)受賞。

[滞在中の過ごし方]

- ・フィールドワークや撮影
- ・遠野の自然環境や歴史・文化に関心を持ち、フィールドワークや撮影を実施



[アウトプット]

- ・つくる大学キャンパスである Commons Space において、メディアアーティストとして活動している自らの経験や、フィールドワークで得た遠野の文化等に関する考察をプレゼンテーション形式で実施。



[滞在期間終了後]

- ・ 今回の滞在に関するフィードバック
- ・ 遠野の文化や Next Commons Lab の取り組みに興味を持ち定期的に情報交換

[関係人口へとつながる発展]

- ・ つくる大学や Next Commons Lab の取り組みに対して、主体的な関わりをしてくれる存在へ。Next Commons Lab の SNS コミュニティネットワークに入り、より運営に近い目線から意見を出してくれるようになった。

(ウ) Haburi アーティスト 滞在期間: 7月19日(日)~8月1日(土)



<経歴>

1992年 中国生まれ

2016年 来日

2020年 東京芸術大学美術科絵画科修士卒業

<プロフィール>

東京都在住。大学では主に絵画を専攻。2016年に来日してからは、東京での都会生活経験をもとに、現代社会の消費文化に対する思考を反映した作品を制作。絵・パフォーマンス・インスタレーションなど様々な表現技法を用いた。2019年からは香港の民主運動に関心を持ち始め、大学の卒業制作では香港問題をテ

ーマとした。制作過程はすべて共同作業。海外工場に模型の製作を依頼し、開催したオンラインイベントに集まった世界各地の参加者と共に作品づくりを実施。その経験をきっかけに、創作におけるコラボレーションや参加型アートに取り組み始めた。

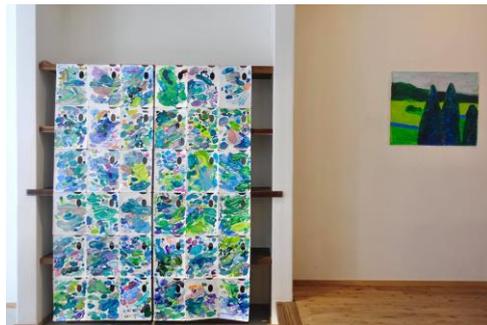
[滞在中の過ごし方]

- ・ 作品制作作業
- ・ 展示会で使用する遠野の自然素材を、ヒアリングをして収集



[アウトプット]

- ・ つくる大学キャンパスである Commons Space にて作品の展示会を実施
- ・ オンラインで滞在期間に考えたことや制作した作品に込められた思いをアフタートークとして配信



[滞在期間終了後]

- ・ 今回の滞在に関するフィードバック
- ・ 滞在期間の様子を自身の SNS で投稿

[関係人口へとつながる発展]

・ 遠野での展示会だけでなく、県内の他地域でも展示会を開催するなど、つながりを広めている。違う季節にも遠野を訪れて制作活動をしたという希望を受けており、今後も情報交換を行って遠野滞在の場合はコーディネートを行う。

(エ) 小川 周佑 写真家・ジャーナリスト 滞在期間：8月17日(月)～8月31日(月)



<プロフィール>

1985 年生まれ。大学在学中にバックパッカーとして南米・中東・アフリカなどを旅し、卒業後は各国の歴史的イベント・文化・民族を取材する写真家・ライターに。2015 年インドーバングラデシュの国境線変更と、それに伴い消滅した「謎の飛び地地帯」を日本人として唯一取材。2018 年謎の妖精「Huldufólk」にまつわる事件、信仰の現状を取材にアイスランドへ。同年から日本における民俗学において重要な場所である遠野を度々訪問している。雑誌『旅行人』『LOCKET』に寄稿、スペイン雑誌『 Año Cero』に写真掲載、写真集『Huldufólk íslands I』を 2019 年に発表。

[滞在中の過ごし方]

- ・フィールドワークや撮影
- ・葉タバコ栽培に関して、地域の農家等にヒアリング。起きている物事の裏にある背景や人々の息遣いのようなものを取材。



[アウトプット]

- ・つくる大学キャンパスである Commons Space にて、これまでの経験や滞在中の調査をふまえたプレゼンテーションを実施



[滞在期間終了後]

- ・ 今回の滞在に関するフィードバック
- ・ 滞在期間の様子を自身の SNS で投稿
- ・ つくる大学の講師としてオンラインで企画実施

[関係人口へとつながる発展]

・ つくる大学で講師として企画開催を行ったこともあり、つくる大学を自ら発信する存在へ。つくる大学自体のことや、おススメのつくる大学の講座やイベントを自身の SNS 等で自主的に発信。つくる大学のその他の講座にもよく参加する、つくる大学コミュニティの一員としても関わりを持っている。

〈新型コロナウイルス感染症拡大の影響で受入保留となったクリエイター〉

- ・ 音無 史哉（東京） 笙、雅楽奏者
- ・ 金谷 幸奈（秋田） 料理人・つながりクリエイター
- ・ 野口 竜平（東京） 芸術探検家

6 モデル事業としての成果検証

6.1 事業成果（目標達成状況）

事業の目標・達成状況

	目標 (定量目標の場合は目標数値も記載)	達成状況
1	首都圏から講座に参加する参加者割合 60%	22.26%
2	1 ユーザ（首都圏受講者）あたりの連続講座参加回数 6 回	3 回
3	首都圏月額会員の継続率	100%
4	首都圏で活動している講師が開催する講座開催割合（その月に開催する講座の上限 30%が首都圏の講師が務める） 上限 30%	18%
5	「つくる大学学生オンライングループでの参加者数の増加」で関係人口創出できたか検証する。	16 名増加
6	「つくる大学キャンパス利用者数の増加」で関係人口創出できたか検証する。	キッチン・コワーキングスペース、コミュニティスペースは昨年に比べ利用者数は減少したが、ゲストハウスは長期滞在者が増えたことにより利用率が上がった。

①首都圏から講座に参加する参加者割合

目標 60%

現在 22.26%

・コロナウィルス感染拡大により、企画していた現地参加型の講座を保留にするなど、地域でやるからこそ魅力が増すような講座を仕掛けられなかった。

・講座はオンラインでできるものに切り替えたが、首都圏から参加された方は一度すでに旅行などで訪れ地域と接点があるという方が多く、2回目以降の関わりを探って参加されていた方が多かった。

②1 ユーザ（首都圏受講者）あたりの連続講座参加回数

目標 6回

現在 3回

・首都圏受講者においては最大3回の参加回数であった。ほとんどが1、2回にとどまった。

・継続的な参加につなげるため、オンライン参加→現地参加のプロセスをつくる想定だったが、現地開催の講座の開催は感染状況に左右されてしまうため、確実にできる企画を優先的に行っていたことが一要因である。

・首都圏以外ではこれまで6回参加された方がいる。

③首都圏月額会員の継続率

目標 50%

現在 100%

・継続会員のうち首都圏在住者は2名で、講師を務めたことがありかつ講座に参加される方が会員制度を継続しつづけている。

・首都圏以外の会員は、参加したい講座がないや都合が合わず参加できない月に継続解除をされることがあった。

・会員同士の横のつながりをつくるためのコミュニケーションの場として交流会を9月に予定していたがコロナウィルス感染拡大を受け中止。今年度は開催ができなかった。

・継続的に興味関心に触れる講座やイベントを企画し早めに広報をすることにより会員継続につながる。

④首都圏で活動している講師が開催する講座開催割合（その月に開催する講座の上限30%が主権の講師が務める）

目標（めやすであり、上限） 30%

現在 18%

・首都圏の方が講師を務める割合は月によって変動し、1月は33%だった。全体として30%以内に収まった。コロナウィルスの影響がなければ25%程度になると想像される。

・地域の方が歴史や知恵、土地を活かした講座ができることが地方をキャンパスにする魅力となるため、上限30%は妥当な目安と思われる。講師のバランスを意識して引き続き企画していきたい。

⑤「つくる大学学生オンライングループでの参加者数の増加」で関係人口創出できたか検証する。

クローズドなオンライングループ参加者（招待制）

7月末時点 9名→報告時時点 25名（+16名）

・参加者間の交流を深めるため当初クローズドな場を用意していたが、交流会が開催できなかったことやマーケティング担当の体制変更等の影響を受け、10月以降はオープンに情報を公開していきファンづくりへ方針を切り替えた。

・結果、つくる大学 Facebook ページフォロワーは大きく増え、参加者による情報のシェアも増えた。

7月末時点 555名→報告時時点 632名（+77名）

⑥「つくる大学キャンパス利用者数の増加」で関係人口創出できたか検証する。

・キャンパス利用者数は昨年度の同時期と比較して下記の通りとなった。

	キッチン・コワーキングスペース	コミュニティスペース	ゲストハウス
2019年7月～2020年2月	3,046名	1,041名	76名
2020年7月～2021年2月	1,818名	951名	104名
増減率	-40.3%	-8.6%	36.8%

・その他キャンパスを利用したいという相談を受け、講座やサークルの開催やと並行して下記のような使われ方も見られた。

- ・ホップを使ったシロップの販売展示会
- ・中学生・高校生の読書、宿題をする居場所
- ・中学生の持込自主イベント
- ・個人全体の施術場所としての利用

6.2 事業成果（関係人口の地域とのかかわり方）

(1) クリエイターインレジデンスの受け入れによる関係人口の創出



2~3 週間程度の長期で受け入れを行った 4 人のクリエイター全員が、滞在期間終了後も継続的な関わりをしている。遠野にはほぼ繋がりもなかった主に首都圏在住のクリエイターが、制作活動を行いながら長期滞在することによって、クリエイター自身の制作活動においても意義を生み、継続して地域に関わることで地域にとってもよい影響を生むことにつながったことは、大きな成果である。新型コロナウイルスの影響で保留となっている、滞在予定だった他 3 名のクリエイターも新型コロナウイルスが落ち着いた時期に遠野を訪れる希望は変わらず、事務局との情報交換を引き続き行っている。このような成果を上げることができた要因として、以下の内容が考えられる。

①事務局が滞在中のフィールドワークや地域との接続をコーディネート

5.5 活動内容③ で詳細を記載した通り、既に地域にネットワークのあるコーディネーターが、クリエイターとフィールドワークやヒアリングを行う地域の人をつなぐ役割を担った。全くつながりのない地域でスムーズなコミュニケーションを取りながら、地域に深く入り込むヒアリングやフィールドワークを行うことは、地域外から訪れるクリエイターにとっても、その対応をする地域内の人にとっても、非常に難しいことである。ローカルベンチャー事業でもコーディネーターとしての役割を担ってきた事務局スタッフが、地域で活動し築いてきたネットワークを生かして両者を繋ぐ働きをしたことで、クリエイターもスムーズに自らの活動に入ることができ、地域の人もスムーズに力を貸してくれることへとつながった。

②クリエイターと地域の人が接点を持てるアウトプットの機会の設定

遠野にかつてあった「文武修行宿」において、宿泊の代わりに技術を持った人たちが自らの技術を地域の人達に教える仕組みがあったように、クリエイターインレジデンスでも滞在の最後にはクリエイターに自らの経験やスキル、知識、滞在期間で得た学び等を地域の人に伝える、アウトプット企画のコーディネートと運営を行った。プレゼンテーションや展示会を開催し、クリエイターは地域の方との直接的な接点と交流の機会を得ることができ、地域の人も自分たちにはなかった新たな視点を得る機会となった。クリエイターはこの場で出会った地域の人と、その後もやり取りを行うなど、アウトプットの機会を設定したことでその後の自発的な交流につながった。

③滞在期間終了後のクリエイターとの定期的な情報交換

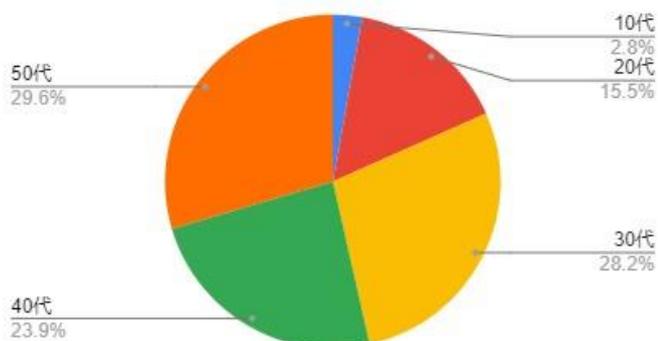
クリエイターインレジデンスの期間終了後に、クリエイターの方につくる大学事務局のサポート体制や仕組み、設備環境等についてフィードバックを頂く面談の機会を設けた。ただ感想を聞くのではなく、運営側目線でのフィードバックを頂けたことで、これからのクリエイターインレジデンスやつくる大学の進め方等について、共に考える貴重な機会となった。クリエイターの方々も、サービスの受け手という認識ではなく、共につくる人であるという認識を持つきっかけとなったことが、その後もつくる大学に関して自主的に働きかけをしてくれることへと繋がったと考えている。

また、その後もクリエイターの方々とのつながりを絶やさぬよう、継続してやり取りを行うことを意識している。プライベートとしてもコミュニケーションを取れるような関係性をつくることのできたことで、遠野にいらなくても遠野の様子を伝えたりクリエイターの活動の様子を聞いたり等、関係性を維持することができている。その情報交換の中で、クリエイターがその後も遠野に何度か訪れたりつくる大学の講座・イベント等に参加したりという展開にもつながっている。

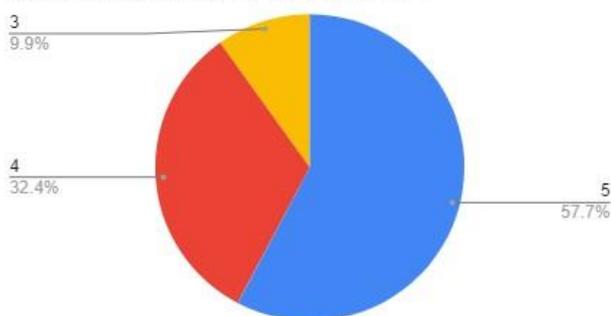
(2) "つくる人"があつまる場所へ

各講座の後に参加者へアンケートを実施し、つくる大学に集まる人の興味関心や今後の継続的な関わりのヒントになる情報を収集することができた。

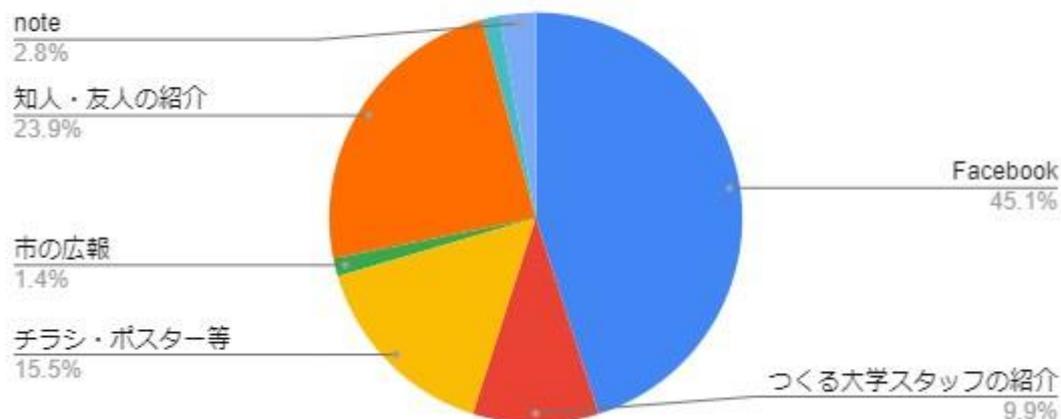
参加年代割合



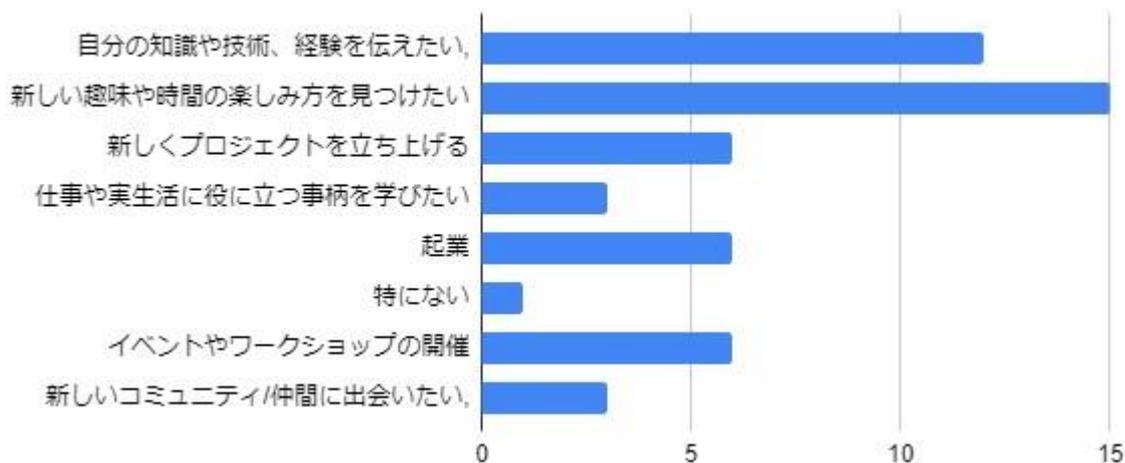
講座の満足度はいかがでしたか？



どこでつくる大学を知りましたか？



今後やりたい・挑戦したいと思っていることはありますか？



参加者の中には自分の知識や技術、経験を伝えたい人、新しいプロジェクトの立ち上げやイベント、ワークショップの開催をしたい人が少なからずいることが期待以上だった。このような思いをもっている方にその実現をサポートする形でかかわり続けることで、チャレンジを応援することができる。利用できるリソースが身近にあり協力者がいる地方だからこそ実現できるものがあると、消費するだけでなく、主体的に何かを生み出す側になり地方と継続的なかかわりを持つような関係人口が創出される可能性が高いはずである。

6.3 事業成果（その他）

◎つくる大学を中心に、子どもの活動を応援する動きが生まれた

つくる大学では誰もが作り手になれる機会を創出できるよう取り組みを行っているが、地域の現役中学生が、つくる大学キャンパスを何度も訪れているうちに自ら企画を開催してみたいと事務局スタッフに声をかけてくれたことから始まった、よい循環を生む事例がある。その中学生は、つくる大学で自らの興味や感じている課題に基づいて、「大人の夏の自由研究会」という全3回のサークル活動と「SDGs勉強会」という講座を2つ開催した。彼の取り組みを見て、過去につくる大学の講座に参加したことのある大人が、彼の活動を応援するため無償で使わなくなったノートパソコンを寄付してくれるという出来事もあった。その人は引き続き中学生の相談にも乗ってくれるようになった。

この事例はその中学生自身や応援をしてくれた大人自身にとっても価値の大きい出来事になったが、その一連の動きを見ている周りの子どもたちや大人たちにもよい刺激を与えてくれたのではないかと考える。小さな出来事ではあるが、引き続きつくる大学では一人一人でのコミュニケーションとコーディネートを丁寧に行い、このような事例を積み重ねていきたい。

また今回中学生が行動に起こしてくれたことは、彼自身の特性や努力によるものもちろん大きいですが、つくる大学キャンパスに通いそこに集まる多様な大人たちの活動の様子を見ていたことも少なからず影響しているのではないだろうか。未来を担う子どもたちにとっても、多様な大人たちの生き方

や働き方を知り、自分自身の視野や可能性が広がる機会づくりも引き続き実践していきたい。



6.4 本年度の課題と対応

(1) コロナウィルス感染拡大による講座やイベントの選定制限

課題：対面形式の講座や食事を伴う交流イベントや講座が開催できなかった。

対応：コロナウィルス感染拡大の状況を見て、対策を徹底しながら徐々に講座を復活させていきたい。

(2) 継続的な講座の企画と集客

課題：継続的に様々なカテゴリの講座を企画し続けること、集客を安定させるためにファンを増やす。

対応：博物館やNPO団体、観光協会などの地域事業者と連携し、すでに動き出しているワークショップやイベントなどの技術面やSNS発信で協働する形でコラボレーション企画を増やしていくことで地域事業者を支援することができ喜ばれた。またこういった学びの場があることを認知してもらうことに役立った。またファンを増やすために、招待枠を持ち続けることは参加するハードルを下げるために有効だった。

6.5 今後の事業のあり方

(1) 事務局運営の分担

課題：キャンパスをもっと多くの方に利用してほしい。

対応：キャンパスをつくる大学生（会員）がいつでも使えるワーキングスペース、イベントスペースとして開放。利用料金は低く設定し、利用方法もわかりやすくすることにより、ワンデイキッチン、イベント開催などのチャレンジを後押し。地域住民も外から来る人も主体になれるオープンな場づくりを目指す。それにより毎月〇日は～さんがランチを出す、第3土曜日はフリーマーケットがあるなど、チャレンジしやすい公共空間として認識されることを目指す。利用者が責任をもってつかうことにより、清掃や受付などの事務局運営をも分担していく。

静岡県焼津市「みんなの図書館さんかく」・石川県加賀市「一箱オーナー制度」などを参考に関係

者参画型の空間づくりを目指す。（本事業のメンバーでもある Next Commons Lab 加賀の事務局が仕掛け人であり情報共有いただいている）

（2）ノウハウの共有

課題：他地域への展開やイベント・ワークショップやしたい人への後押し

対応：モデル事業をさせていただいたことにより、講座運営に機材を用いることや、SNS の広告による効果の検証を行うところ等ができた。これらの効果を蓄積し、他地域で同様の学びの場をつくりたい方へノウハウを提供していく。（現につくる大学のようなオルタナティブスクールをやりたくて参考に参加した、という方がいた）

7 自立化・自走化の検討

7.1

- ・関係者が多い企画・製作会社、グリーンツーリズム NPO 団体、博物館等とのコラボレーション企画は参加人数が増える傾向があることがわかった。今後も連携企画を増やしファンづくりを目指す。
- ・県外から、現場を求めるニーズが高まっている。コロナの状況をみながら現地参加型の講座やイベントを徐々に復活させていく。
- ・蓄積してきた多様なコンテンツや講師ネットワーク、運営ノウハウを活かし、企業人の学びの場として展開。企業研修などのプログラムを共同開発し研修場所やワーケーションの実践地に発展させていく。（パーソル総合研究所と1月に2泊3日の短期ワーケーションプログラムの開催を予定していたがコロナの影響を考慮し来年度に延期となった）
- ・継続参加者（会員）にリソースとしてのキャンパスを開放していき公共空間として使っていただく。キャンパスをつくる大学生（会員）がいつでも使えるワーキングスペース、イベントスペースとして開放。利用のルールなどをあらかじめ決め、共に運営していく場所へすることで事務局運営を分担していく。ワンデイキッチン、イベント開催などのチャレンジを後押し。地域住民も外から来る人も主体になれるオープンな場づくりを行っていく。

8 他地域への横展開の可能性の検討

8.1

- ・今回関係人口を首都圏（一都七県）と定義したが、講座には大阪、広島、京都、香川、宮城、山形からも参加者がいた。
- ・石川県加賀市での講座が行われた際、首都圏からの参加者の他、つくる大学がきっかけで、遠野から参加される方もいた。



そのように、学びの場のプラットフォームにより、首都圏⇄地方だけでなく、首都圏⇄地方⇄地方の関係が生まれたことがわかった。つくる大学に参加すると、地方と地方がダイレクトにつながること、地方と接点をもつ入口機能としての有効性を感じた。”つくる人”があつまるコミュニティを分散連携型につくっていくことで、魅力的なローカルと深く接点をもてるコミュニティネットワークへ発展していく可能性を受け、他拠点への展開を考えていきたい。

